

3・教育者為綱

原敬らに「第二の明治維新」を説く

慶応3年(1867)、為綱は宇部の野田郷校で経書の素読や講義を受け持ちました。その後、藩校作人館の寮長兼長上生となります。当時の教え子には、後に総理大臣となる原敬をはじめ、佐藤昌介(北海道大学初代総長)、菊池武夫(中央大学初代学長)、阿部浩(東京府知事)、那珂通世(東洋学創始者)など後の日本を背負って立つ有為な人材がそろっていました。その頃の為綱について佐藤昌介は、「小田仙彌という先生は精神教育家で、青年の志気を鼓舞する」人



原敬(前左)と作人館時代の仲間
(原敬記念館所蔵・明治8年4月25日・東京にて)

文を草した為綱は1年の刑となり、弘前で獄中の人となります。為綱は武力ではなく、言論で訴えるべきとの主張でしたが、真田にうまく利用された面がありました。

出所後の為綱は、7年の謹慎期間を地元宇部で過ごし、この間、後述の憲法評論を記します。また、宇部の小倉山入会騒動の総代を務めます。小倉山は代々共有地であったことを証拠立て、遂に県を動かす認めさせます。しかし、国はこれを認めず、為綱は県には勝ちますが、国に負けてしまっています。この悔しい思いが、のちに政治家を目指す動機の一つとなったと思われます。

6・思想家為綱

先見的な「憲法」を論ず

明治政府は憲法起草に着手し、明治13年(1880)、元老院が国憲第3次草案を作成します。しかしこれは「欧州之制度模範」であるとし、伊藤博文、岩倉具視などにより不採択とされます。

一方、反政府運動は西南戦争終結後、武力から言論へと

であったと述べています。

また為綱は、盛岡だけでなく八戸においても近代八戸を築く青年たちを育てることにあります。明治21年(1888)、為綱は北村益(八戸町長)などに八戸義塾の創立を懇願され、講義を行いながら創立に尽力。この中から湊要之助(八戸青年会)、奈須川光宝(衆議院議員)、関春茂(衆議院議員)などが育って行きました。湊は為綱の教えを「扇の要」といい、北村は為綱を「恩師閣下」と呼びました。後年、北村が八戸町長となり久八線(八戸線)敷設事業を手掛ける際、政界の実力者原敬と恩師が共通であったことは都合がよかったと後述しています。



「三陸開拓上言」(岩手県立図書館所蔵・明治6年8月)

翌22年、明治憲法が公布され、さらに翌年には第1回衆議院議員選挙、国会開設と日本の政治は目まぐるしく動いていきました。為綱はこの動

舞台を移していきます。国会期成同盟が結成されるなど、民間による私擬憲法案作成が盛んになります。現在までに50以上と言われる私擬憲法草案が発見されています。その中の一つに「小田家文書」の中にあった「憲法草稿評林」があります。

「憲法草稿評林」の構成は、「国憲第3次草案」(極秘文書)に評論(下段評論)が加えられ、この2つにさらに評論(上段評論)が朱筆で加えられたものでした。下段評論者には数名の名が上がり未だ特定されていません。また、上段評論者について多くの研究者は、小田為綱であるとしています。

また、「憲法草稿評林」の書かれた内容に注目が集まりました。下段評論には「国民投票」が提案され、上段評論においては「廢帝(退位)の法則」、「議會の権限強化」が明記されています。これらは他の私擬憲法草案には見られない点です。先見性に富んだ内容に研究者たちは注目し、関心を集めました。特に「議會の権限強化」は、昭和における軍部の暴走を抑止できたのではない

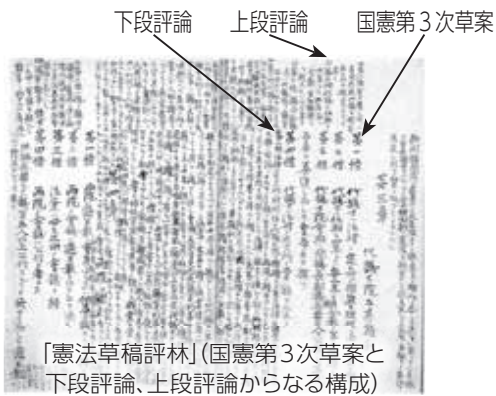
きに合わせるかのように八戸を去り、初の衆議院選挙に打って出るようになります。

4・経世家為綱

三陸に夢を描く

為綱は新政府内が征韓論で揺れる明治6年「三陸開拓上言」建白書を提出しました。内務卿大久保利通が東北開発事業を建議したのは明治11年であり、その5年前に為綱はすでに開拓案を提出していたことになりました。その先見性には驚かされます。

旧南部藩領を9原野に分け、各原野に失業旧士族を配置し、授産と開拓を行うというものでした。各地への移住戸数耕作田畑、開拓高、開拓諸費用を算出。具体的かつ計数的に裏付けられた計画でした。また、膨大な開拓諸費用の捻出は、米塩所、鑄銭所を開設し賄うというものでした。さらにその構想は、住居や町並みの設計から自治組織のあり方までに及びました。このように、為綱は死の直前までに5つの提言書を提出しますが、すべて拒否されてしまいます。他方、単に建白書を提出す



「憲法草稿評林」(国憲第3次草案と下段評論、上段評論からなる構成)

かと、高い評価を得ます。

この「憲法草稿評林」は、人権を重視した「五日市憲法」(千葉卓三郎)、人民権、抵抗権を唱えた「東洋大日本国国憲案」(植木枝盛)と同様、数ある私擬憲法草案のなかでもその先進性において3本の指に入るといわれています。私たちは「憲法草稿評林」を草した郷土の偉人をもっと誇りとしていいのではないのでしょうか。

7・政治家為綱

夢叶わず、死す

明治23年(1890)7月1日、第1回衆議院議員選挙が実施されました。為綱は自分の夢を実現させるには、是が非でも国会議員にならなければと思い、立候補しました。しかし落選。第2回も落選。第3

回、第4回は不出馬。そして第5回で初当選を果たし、続けて第6回も当選しますが、任期中に病に倒れてしまいます。大隈重信の立憲改進黨系政党に属し、犬養毅、尾崎行雄、大隈(南部)英磨などと政治活動を共にします。日記には、板垣退助、中江兆民、田中正造、陸羯南、谷干城、河野広中などの名前が見られ、明治の偉人たちの幅広い交流をうかがわせます。まさに為綱は彼らと共に、明治時代のど真ん中を駆け抜けたと言えるでしょう。明治の偉人からの書簡、ハガキが多く遺されています。為綱が衆議院議員に当選した時には、すでに60歳でした。政治家としての活動は実質3年余しかありませんでした。あと10年でも長く政治活動が

5・憂国者為綱

西南戦争で檄文を草し投獄

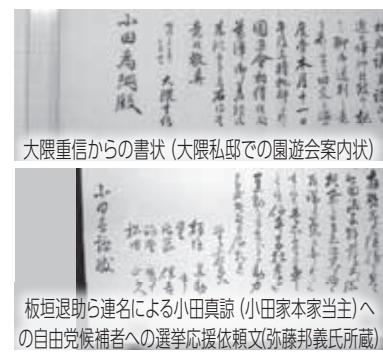
国内最後の戦争と言われる西南戦争に為綱は関わり、投獄されることになりました。明治9年(1876)10月、神風連の乱(佐賀)、秋月の乱(福岡)、萩の乱(山口)、思案橋事件(東京)と立て続けに士族の反乱が起こりました。この年の1月、真田大古(青森県田子町)は、東京で「評



獄中での為綱肖像画

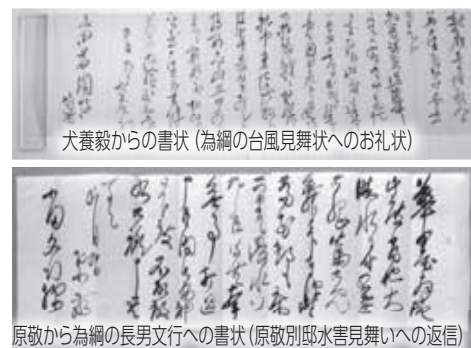
論新聞」記者たちと同居します。「評論新聞」は薩摩私学校の意をくんだ主張を展開し、反政府運動の急先鋒となります。真田は彼らの主張に同調し、東北での同志拡大に奔走。士族の反乱時には上京を促されるなど、反政府運動の情報を知り得る立場にいました。

翌年、西郷隆盛はついに決起します。この動きに真田は呼応する計画を立てます。青森、岩手県庁を襲撃し武器、金品を奪い、東北の反政府士族を呼び集めて南下し、明治政府の転覆を謀るという計画でした。そこで、同志に訴える檄文を、旧知の為綱に依頼します。為綱は断りますが、真田の再三にわたる懇請について折れ、檄文を草します。為綱はこの中で、西郷蜂起には大義がないとする一方、政府への批判も記しました。この計画は密告により未遂に終わります。計画の実行者真田は5年、檄



大隈重信からの書状(大隈私邸での園遊会案内状)

板垣退助ら連名による小田真諒(小田家本家当主)への自由党候補者への選挙応援依頼文(弥藤邦義氏所蔵)



犬養毅からの書状(為綱の台風見舞状へのお礼状)

原敬から為綱の長男文行への書状(原敬別邸水害見舞いへの返信)

続いたならば…と悔やまれます。為綱は病に倒れ、「どうしても生きたい。生きのびて日本の政治を自分の手で何とかおしたい」と悲痛な叫びを遺しました。

絶筆 「夜来雪、朝来霽れて
天気寒し」(3月3日)明治34年4月5日死去(63歳)

著者：弥藤 邦義(畑田)

生誕180年 郷土の偉人
・小田為綱資料展
「為綱、明治時代を駆け抜ける」
▶日時…2月9日(土)、10日(日)
9時～17時(10日は16時30分)
※展示資料説明会を10日(日)11時から20分程度開催します
▶会場…アンバーホール3階展示室
図文化課 ☎52-2700